

エドム側からモアブの地を目指したイスラエル。飲料水が尽きてしまいました。窮したヨラム王に、ヨシャパテは預言者を求め、三人でエリシャの所に向かいます。

1. エリシャの許に行き (13～14 節)

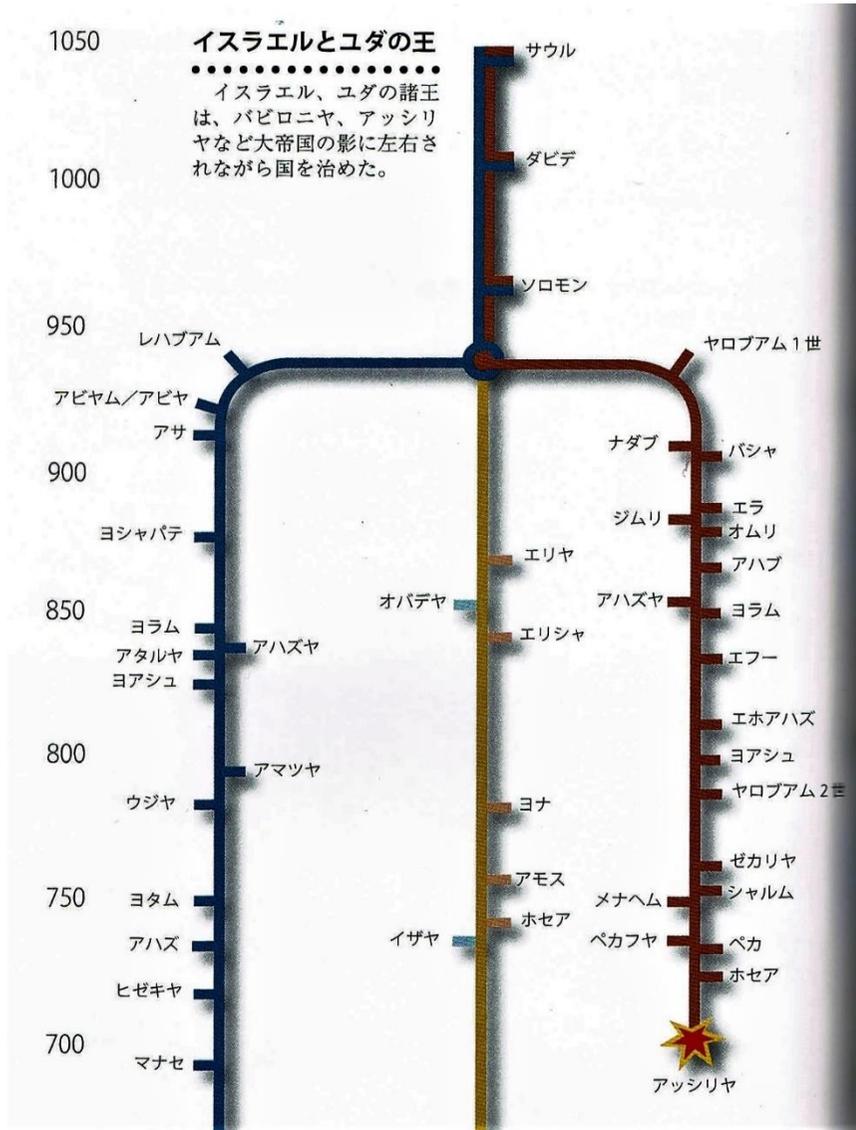
①エリシャの進言 (13) 「エリシャはイスラエルの王に言った。『私とあなたとの間に何のかかわりがありますか。あなたの父上の預言者たちと、あなたの母上の預言者たちのところにおいでください。』」預言者エリシャがいたのはイスラエルのサマリヤだと思われます。そこまで、王達は従者共々行ったのでしょ。ようやく着いて、エリシャに導きを求めます。その時、エリシャはイスラエルの王ヨラムの信仰に疑義を示して言います。「私とあなたとの間に何か関わりがありますか」と協力を否定します。ヨラムの父アハブは偶像バアルや金の子牛を拝することによってつつを抜き、母イゼベルはバアル神に仕えることに熱心でした。そこで、それら預言者の所に行ったらどうですか、と皮肉気味に言いました。

②ヨラム王の弁解 (13) 「すると、イスラエルの王は彼に言った。『いや、主がこの三人の王を召されたのは、モアブの手に渡すためだから。』」すると、ヨラム王は、あのモアブに入ろうとした時に、水が欠乏し、モアブとの戦いに負けることを描いて、「これは、主がモアブの王の手に、この三人を渡すためなのだ」という否定的な発想を述べましたが、同じことをエリシャにたいしても、繰り返して述べています。ヨラムは言葉足らずで、エリシャに助けてもらいたいという願いを出していません。

③ヨシャパテのために (14) 「エリシャは言った。『私が仕えている万軍の主は生きておられる。もし私がユダの王ヨシャパテのためにするのでなかったら、私は決してあなたに目も留めず、あなたに会うこともしなかったでしょう。』」エリシャははっきりと言います。つまり、本来ならあなた（ヨラム王）には会うことすらしないのですよ。万軍の主は生きておられる方です。今、エリシャがヨラム王と会っているのは、信仰あるユダのヨシャパテ王が同席しているからです。彼のために会っているのですと釘を刺しています。

2. 風も大雨も見ずに (15～17 節)

①立琴をひく者を (15) 『しかし、今、立琴をひく者をここに連れて来ててください。』立琴をひく者が立琴をひき鳴らすと、主の手がエリシャの上に下り、エリシャはおもしろいことを突然と言います。立琴をひく者を連れて来ててください、というのです。かつて、ダビデが羊飼いの頃にサウル王の前で立琴を弾いて、その心をなだめたことがありました。今ここで、琴演奏を所望するとはどういう



ことでしょう。奏者が立琴を奏で始めると、なんと主の手がエリシャの上に下りたというのです。聖霊降臨にも似ています。エリシャにはそのことが予感されたのでしょう。だから、立琴演奏を求めたのです。

②この谷に溝を掘れ (16)「彼は次のように言った。『主はこう仰せられる。《この谷にみぞを掘れ。みぞを掘れ。》』」エリシャは、主に導かれながら、預言を伝えました。「この谷に溝を掘れ」。それも次々と掘りなさいという、主の御言葉でした。

③風も見ずに (17)「主がこう仰せられるからだ。《風も見ず、大雨も見ないのに、この谷には水があふれる。あなたがたも、あなたがたの家畜も、獣もこれを飲む》」主の御言葉はさらに続きます。雨をもたらす風も吹かず、向こうが見えないような大雨が降るわけでもないのに、この谷には水が溢れていくというのです。その水によって、民も、民が管理している家畜や獣も命を保ち、生きることができるというのです。

3. エドムの方から水が流れてきて (18~20 節)

①モアブを手中に (18)「これは主の目には小さなことだ。主はモアブをあなたがたの手に渡される。」谷に水があふれることも、この後に語られることも、人間の側にとっては、驚くべきことであつたとしても、全知全能の神からすれば、決して大きなことではないというのです。この後の事とは、反抗してきたモアブについて、これまでは劣勢でしたが、イスラエル、ユダ、エドムの側が優勢になっていくというのです。

②町々を打ち破り (19)「あなたがたは、城壁のある町々、りっぱな町々をことごとく打ち破り、すべての良い木を切り倒し、すべての水の源をふさぎ、すべての良い畑を石ころでだいなしにしよう。」イスラエル、ユダ、エドムは、モアブの地にある城壁のある町々や立派な町々に対して攻撃し、勝利をする。その地にある良い木を切り倒し、すべての水の源をふさぎ、すべての良い畑を石ころで台無しにするとは、完膚なきまでも滅ぼすということです。ヨシュア記などに見られる「聖絶」にも似ています。紀元前 900 年ほどの時代にあつて、戦いではどうしてもそのようになさざるをえなかったのです。妥協して中途半端なことをすれば、その後に自軍の滅びを招くことであつたのからです。

③エドムの方から流れてきて (20)「朝になって、ささげ物をささげるところ、なんと、水がエドムのほうから流れて来て、この地は水で満たされた。」さて、エリシャを通して与えられた主の預言のお言葉は、成就することになります。当時、朝夕にはささげ物がささげつつ礼拝がささげられていましたが、朝の礼拝の時のことです。水がエドムの南東の山から、まずはエドムの地、さらにユダ、イスラエ

ルの地にも水が広がっていったのです。それは、そこにいる民にとっては恵みの水でした。喜びをもたらすものでした。大地は水で満たされ、飲むこと、農業をすること、働きをすることができるようになっていったのです。

《結論》アハブの子ヨラムはアハズヤの後を受けて、イスラエルの王となりました。こうした時局をねらうようにして、モアブの王メシャはイスラエルに逆らい、ました。イスラエル王となってまだ日の浅いヨラムは、ユダのヨシャパテ王やエドムの王に援助を申し出て、モアブに向かうこととしました。南のエドム方面から、モアブへと進軍することにしました。ところが、思っていたよりも日数がかかってしまい、兵や動物たちに供給する水が不足する事態になってしまいます。困りはてたヨラムは、弱気になりました。そんな時に、ユダのヨシャパテ王は預言者からの御言葉を求めます。そして、三人してエリシャの許に行くことになりました。おそらくは、兵の大半は残し、精鋭の従者たちを連れてサマリヤのエリシャの所に行ったのです。

そして今朝の聖書箇所では、エリシャとイスラエル王の対話へと移りますが、話の内容から見ると、聖書には記されていませんが、イスラエル王とユダの王、エドムの王はエリシャと共に、兵たちがいるエドムの地まで戻つたのでしょう。そうでないと、話がうまくつながりません。その対話では、①エリシャはユダの王ヨシャパテの信仰のゆえにヨラムと会っているのだということ ②立琴を奏者に弾かせよ、ということが話されました。その結果、琴の音色と共に、エリシャに与えられたのは、①谷に溝を次々に掘れ。 ②そうすれば、風も大雨もなく水はあふれる。 ③モアブの地はイスラエル、ユダなどの手にくだる。というメッセージでした。そして、この預言の第一のステップが実現します。つまり、水がエドムの南方の方から流れて来て、地に水が流れてきたのです。恵みの水が大地を潤したのです。

ここで、注目しておきたいことは、主が「風を見ず、大雨も見ないのに、この谷に水が溢れる」と預言され、これが実現したことです。人間が予測する道筋を越えて、主は事を起こしてくださるのです。雨の風が吹き、雨が降ってこそ、水は流れて来るのが自然の理です。ところが、それらの前触れなしに、水の流れがもたらされたのです。

これは、私たちの宣教、教会生活、信仰生活にもあてはまるので

す。たとえば、ここ数年のコロナ禍にあって、教会もその礼拝や宣教や交わりが、疲弊しているのは事実です。宣教面でいえば、コンサートなどができずに、立ち往生している感もします。もちろん、そんな中にあっても知恵を尽くして、できることをなしていかねばなりません。しかし、そのように何もできない状態にあっても、主は泉を備えてくださるというのが、今朝のメッセージです。私たちの現実の信仰生活においても、停滞してしまっていることもありましょう。私たちは、あれがないから、これがないからととやがちです。また、いろいろとマイナスの情報を集めて、悲観しがちです。しかし、そんな中にも、主は働いてくださり、事をなしてくださるというのが今朝のメッセージです。主はあなたの困難な日常に、予想を越えて働いてくださり、脱出の道を備え（Iコリント10:13）、事を成し遂げてくださるのです。諦めずに主を仰いでいこうではありませんか。